

『確信犯的生きざま』 について

向井 孝

秋山とつきあって、だんだん気がおけなくなるのに、ぼくは20年以上かかった。

もちろん15も年が違うことや、東京と大阪年一〜二回しかないぼくの上京ということがあったからだ。がしかしまた、より秋山さんにぼくを結びつけるものとして、「詩」と「アナキスト連盟」という二重の特別なことがあったにもかかわらずである。

たとえば同じとき一九四七年のアナキスト連盟で秋山さんと殆ど同条件の故人植村諦さんと、ぼくははじめて出会った。

二回大会で秋山さんと始ど同条件の故人植村諦さんとも、ぼくははじめて出会った。諦さんはそのときたしか大会議長をしていたが、休憩時間の一地方から初めて上京してきて誰一人顔見知りがなく、戦前派の錚々

たる人たちのなかで「ぼつん」といるぼくを見かけて、「イオムの向井くん？」と気軽に声をかけてきた。

大会が終わった翌日、約束で諦さんの仕事の事務所へいくと、大いそぎで残務を片付けたあと、ひるまななに「ちょっと」と、つけのきく近所の「パイヤへ誘った。「今日はお金がないので」と云いながら…。

そこで何かやしゃべって酔っぱらい、そろそろ帰ろうとするぼくに、諦さんが急に「でもぞ内ポケットから出してきたのが「三枚たらずの詩稿」だった。

「君の感想を思うまま」といわれて、イオムの同人会でやっている調子そのままに「植村詩」に散見する陳腐な用語と、安易な抒情性さもなくばみえみえの政治的アピールなど、遠慮えしやくなく指摘した。そして、がっかりしながら一々うなずいて受けとめる諦さんの姿に、ぼくの方がだんだん参ってしまった。

そんなことをきっかけに、ぼくにとつての諦さんは、アナ連のなかでも、もっとも親愛感をもつ先輩同志となった。(ここでは関係ないが、戦後上野で古着屋をしていて、上京のたびにぼくを泊めてくれて、そのうちアナ

キスト会館ができれば、その下足番になりたいたいって、ちょっと余裕があれば貯金箱にお金を入るのでぼくの目の前で悲しそうに夫婦ケンカしていた「李享秀」さんを、心に残るもう一人の同志としてかき残しておきたい)

…が、秋山さんはまるっきり違っていた。そしてだんだん気易く、年月をかけて深くつきあうようになったにもかかわらず、最後までそんな関係とは、きっぱりと無縁だった。

2

1月21日の追悼会席上でぼくは—

「秋山さんは、ぼくが追ってとらえようとしてみてもとらえられない、なにかわからんことがあって…」というような意味のことをしゃべった。

しかし人を「わかる」とか「わからん」といっても、例えばもっともよく知っている苦の自分を、自分が判っているかといえは、すこぶる怪しい。つまり他人を判るといふのは、たまたま自分にひきつけやすい部分で都合よく納得して、幻想的に安心することではかないともいえる。

その意味でいえば、秋山さんには自ら提示

したものに恣意的な覗き見を許すことを、自他に許さない—というようなものがあって、ぼくにとってそのような秋山さんの、なかなか覗けぬ未知のなにかが、気がかりでしようがない—ということでもあった。

たとえば秋山さんは「諦さんやその他のアナキストが露呈した、戦時中の転向や動揺—（それは年少で無名ゆえ表面に出なかつただけのぼくにも当てはまる）に対して、一篇の戦争詩をも発表せず、のちの詩集「白い花」に収載されたような詩をかいていたということがある。

秋山さんはそれを、「現実をして語らせる詩法」の時代的な意義として、何度か書いている。がぼくにはただそれだけでない—諦さんやぼくの弱さに対峙するものとして—秋山さんの「わからないなにか」がどこかで関係している気がした。

さらに、秋山さんの詩全般を通じていえば、その詩は、何を云おうとしているか—応明快で、「わかり易い詩」である。その上でわかり易さ以上に、気易くわかることを突き放し、阻む「何か」があって、「秋山詩」のえたいしれぬ魅力をつくり出している、といえるのではないか。

そんな「何か」においてぼくにとつての秋山さんは、別して、詩人であった。そしてそのような「詩人」としての生涯と不可分に、また比類のない仕事をのこしたアナキストでもあった。

といっても、ぼくは秋山さんから直接、自分のアナキストとしての立場や主張について聞いたことはない。またアナ連の内部でときどき起こった論議に口出しし、論争に参加するといった秋山さんをもあまり見たことがない。

ぼくの記憶での強い印象では、60年代に入ってからアナ連機関紙「クロハタ」↓「自由連合」の事務局編集員として、何よりも地道な実務部分を、アナ連解散の最後まで受けて支えた—ということが、まず第一に出てくる。

『アナキズムを自分の思想とする、ということから一歩すすんで、さらに自分の内部に入って、アナキストとしての人間性の再確認を、行動でたしかめるのがアナキストである』と、たまたま秋山さんがかいているのを当てはめると、秋山さんにとつての、その「行動」

とは、まさに自分を「事務屋」として維持しつづける意志だったのかも知れない。また—

『だから私はその組織（創新日本文学会を指す）の中に入って、多数の圧力で政治の文学を押しつける動きには、反対しようと考えながら活動したつもりである。三好にはそれができなかった。アナキストでなかったからだ』—と、現代日本思想大系「アナキズム」松田道雄編の書評の中で書いているのは、松田の編に選ばれている「ある対話」（創新日本文学会に何故参加しないか）にかかれた三好十郎の消極的アナキズムを否とすることでの、「ではアナキストとは—」を自分の問題として、厳密に提起していることと関連するといえるだろう。（その具体的実践が「文学の自己批判」である）

これらのことでも凡そはつきりするようには、秋山さんにとつてアナキストとは、『アナキズムを自分の思想とする』だけでなく、その上でもっと「何か」があることを、自他に律するものだったに違いない。

そのことで秋山さんは、アナキスティックな詩人とは提携しながら、あくまで詩壇とは一線を画した「アナキスト」であることを、生涯固持しつづけたのだ。

さて、この稿を書くこうとして、手許にある秋山さんの著作—20数冊を、ばらばら読み返してみた。そして思いのほか秋山さんが、アナキズムを（思想や運動のせまい枠からでなく）より一般的なものとしてひろめる—という部分に焦点をおいて、秋山さんならではのものを書いていることに改めて目をみはった。

しかもその仕事は、ふつうならだんだん力がおとろえてくる年令—六十才前後からかえってもっとも精神的に—例えば、

「日本の反逆思想」60年、「ニヒルとテロル」68年、「幸徳・大杉・石川」共著71年、「権力の拒絶」編著71年（この巻尾につけた長文の解説風の後記「アナキズムをたずねる」は、アナキストとしての秋山さんを知る上でも注目すべき力篇である）、「自由おんな論争」73年、「反逆の信条」73年、「あるアナキズムの系譜」73年、「竹む、心やさしき反逆」73年…というふうに出されている。

それらの数冊から、もっともよく秋山さんのアナキズムが出ていていると思われる、いくつかの文章を抜きがきしてみると—

▲ 個人として我を侵す何ものをもいささか

たりとも拒否するという態度、生き方として今はこれしかないのだと考えること—のそこにだけ自由があるというのは、心弱い発言だろうか。このことに関するかぎりニヒリズムとアナキズムは差異のないもののように私には思われる。

▲ 「権威」「権力」と太刀うちし、それを角逐しうる一つの方法はニヒリズムである。とすればそのニヒリズムを、アナキズムは哲學的出発点とする。

▲ ニヒリズムの意見というものに私がほとんど賛成同調を惜しまないにもかかわらず、究極において自分をニヒリストと見ることをせずに今日まで来たのは、…至って簡単なことだ。あくまで生きるための、また闘うための思想とならなければならぬ、と考える私の「思想観」なのである。

▲ 反逆思想と革命思想と、それを一つに重なるものとして書きとめるところに、現代のアナキズムがある。

▲ 革命思想と反逆思想とを、言葉として使い分けるその奥に、私が潔癖であらねばならぬ敵の思想がある。

▲ 国家とは何か、それについての否定的な多くの意見を出せば、ほとんどの人と対立

する。それをカクゴでの、それがぼくの信条だ。

▲ ぼくの中にはいつも、国家という枠をとっぱらうことが一番いいという思いがあることが人とちがう。

▲ アナキズムをいう言葉として、各国の、各時代の生活の中から、各種の表現が生まれた。反逆的行動としての表現の他に、ユートピア的到達社会の表現としてあるもの、闘う仲間との連帯と協力を語る場合等々があるなかで、「権力の拒絶」はもっとも現在の民衆の立場から、民衆の意欲を語るものとして、私はこの言葉の守勢的積極性が好ましい。アナキズムの歴史もこの中にあり、民衆の団結もまたここに胚胎している。そしていささかも他を侵すというニュアンスがないばかりか、もっとも民衆的な感覚をさえ備えている。…われわれは民衆としてしかこの「権力の拒絶」という受身に積極性ある言葉を使いたくないのである。

▲ 現代日本のアナキズムは、否定の思想としてまず存在するというのが私の主張したいところだ。

▲ 反国家は、だから今日もっともアナキズムを端的に語る言葉となるのである。

▲ 組織と権力の関係についてもアナキストは潔癖すぎることにあって誤ったためしはない。しかもアナキストはほとんど孤立をづづけている。孤立は名譽でも不名譽でもなく、独立と自主が喜びでなければならぬ。日本の反逆思想としてアナキズムの、それ自体の消長変遷のなかに、かつて破砕されたことのない自信は、政治（支配すること）と真正面から対峙する地点に位置することによって、維持されている。不壊の反逆思想として常にともにある。

5

これらにあらわれている主張は、世上一般の—つまりマルキシズムを社会主義の唯一のものとし、社会変革の思想としてきた風潮のなかで—かつてアナキズムにほとんど触れることのなかった人々にとっては、そもそもの出発点から異なった視野を提示するだけでも、常識破りの新しい衝撃であるだろう。

しかしまた一方、アナキズムを既に知っている者にとって、これらの表現はきわめて秋山的個人的なものであるけれども、それはアナキズムのもつ大きなさまざまな流れの一部分を語るものとして、格別に目新しくかつ独

創的な主張というほどのものではない。

にもかかわらずばくにとつて、これらが見のがし難く強い力で迫ってくるのは、それがすでにばくが知悉している「アナキズム」の一般的な論調でありながら、さらにそれ以上の何か、その表現を超えてあるから—としかいえない。

それを、いまふとおぼろげながらの感じとして聞いたことばでいえば—この場合の比喩として適切ではないかもしれないが、—「秋山さんの生き方における『確信犯』的なもの」、といえるのではないだろうか。

それは、秋山さんの詩にあって、ばくの詩に見当たらないもの。秋山さんのアナキズムにあって、ばくのアナキズムにないもの。秋山さんの生き方において、ばくの生き方に希薄なもの—といい直すとき、より明らかになるだろう。

『わが暴力考』について

和田 英子

一九八九年六月六日、今朝の新聞は中国北京の学生らに、武力弾圧を進めている戒厳部隊の様子を伝え「市民の死者数は「少なくとも七、八千人、天安門広場だけで二千人は死んだ」「一万人死んだ」などの憶測が飛び交い、緊迫と恐怖は強まる一方だ」と特派員は異常事態を報告している。

秋山清さんが存命であればどのような驢りを持たれただろう。十四年前に出版した『わが暴力考』（三一書房刊）の十二章のうち「人と国家とⅡ」には予見性をもって次のように述べられている。

社会主義国家は、資本主義国家を改変して今日に至ったにもかかわらず、次の自由への変革をおそれて、今日のままの「国家」を保全し存在させようとするそのアンチ・進歩性、「人類のあつまりを統治する」国

家という社会制度を保持せんとする反歴史性、これがわれわれとともに二十世紀後半の世界に在る国家擁護の頑迷思想の本質である。……私の結論は今やつぶやきのよう

な手許不如意の告白である。「国家が、国家の民衆に対する機能が、もっとも巨大な暴力である」

『わが暴力考』は壺井繁治に加えられた暴力事件（一九二七年）、岡本潤が坂道で出会った石井秀をステッキでなぐりかかり、「あいづはボルだ、生意気なヤツだ」と吐き出すように言った出来事（一九三〇年）等を当時の状況を冷静に説明しながら「暴力」といわれるものについて秋山さんの見解を述べてゆき、時代が進むにつれて「沖繩」に、違法闘争に、人と国家へと範囲がひろがっていくエッセイ集である。

今の中国情勢が、秋山さんの言い分にあてはまるからと言って、この本を紹介し批評しようとしているのではない。アナキズム、ボルシェビキともに解らぬわたしは秋山さんの記憶力と説明とで「暴力」のあれこれを窺い知ったというばかりである。「コスモス」の終刊号で「秋山さんの仕事をテーマとして」と通知があったとき、『わが暴力考』を思い

起こしたのは岐阜の思想雑誌「幻影」に連載していた一章が頭の奥にあり書きとどめて置きたいと思っただけである。

一九七〇年中頃は企業爆破事件が相つづ騒然とした世の中であった。主に防衛産業や東南アジアへ進出をはかる企業が標的とされていた。「東アジア反日武装戦線」「狼」「グループ」が三菱重工本社の玄関先に私製爆弾を置き爆破させたのは七四年八月三十日正午すぎのことである。同系列の神戸の事業所に動めていたわたしは、晝休みが終わった直後飛び込んで来た取引先の人から「本社が大ごとですよ」ときいて道路へ出て向かいのビルの購買所へ走った。電器店のテレビは爆風で道路に砕け散った窓ガラスの破片の山を写し出し消防の車、救護隊員の動き、サイレンの響きなどただ大事でない東京丸の内の一劃をうっし出していった。

爆破予告は十数分前であったという。電話交換手が直ちに報告しても周辺を無人にすることは出来なかっただろう。

死者八名負傷者三百余名という予期せぬ人身被害について、防衛力増強、アジアへの経済進出をよからぬことと思っっている知識人、

運動家はそれぞれ見解を発表したが、おおむね狼グループに同調的であった。

「そういう企業に勤めるな。道を偶然歩いていて巻きこまれる被害はやむを得ないことだ。」平たくいえばこういう発言がいくつかわたしの目に入ってきた。

わが身にふりかかぬことへの意見は無責任なものだ、とわたしは内心怒っていた。

ある日仕事をしていると閲覧板が回ってきいた。通知とか通達の紙片にまじって手紙が挟まっていて、誰か亡くなった人の挨拶状である。読むと、あの時本社の窓ぎわに立っていて爆風でやられた人の奥さんからの満中陰の書状であった。病気で亡くなった人の挨拶と全く変わらぬ平凡な形式的な文面である。

権力に刃向う爆弾闘争のための巻きぞえ死であっても遺族は日常性のなかで処理し対応しなければならぬ、静かな文字を追いながら遺族のかなしみを思い、日常にくみこまれてしまった非日常の死を実感した。

間組襲撃などたてつづけに事件はおこり、会社にも爆破予告のいたずら電話がたびたびかかって、緊張状態は続いた。

外来者が自由に出入り出来る室内は、多少の荷物を物かけに置くことは可能である。

「もういい加減生きてきたけれども、ここでやられるのはどうしても免だ」とわたしは仕事の合間に考えていた。

その頃（一九七五年頃）吉田欣一さんから「幻野」を頂き『わが暴力考』の一章へ「私である民衆」を読んだ。

「狼を追う」という記事が朝日新聞に連載されていて、その内容についてのコメントがこの章前半の要旨である。「テロの狼グループが何故に発生し発動するか、という社会と政治の現実問題としての解剖を避けた上での発言しか彼らにはできないのである。原因があつて結果がある、という常識を以てせず、爆発という結果とこれを追うて捜査する機関との問題に矮小化されてしまっている」としめくり、次に「狼」どもの行為の敵か、味方かという私の私自身の質問を設定し、私個人と同時に民衆の一人である（民衆を代表する一人）と分裂し対立していることを前提として考えねばならないとして、

私個人の私は、こう考えることがある。罪・がもない者、かかわりもない筈の市民が、変革のためであろうとなかろうと、犠牲になつてたまるか、という感性は、無限爆弾を仕かけた者への怒りとしてぶっけ

のとき書かれたならわたしの心は離れ、詩誌「コスモス」には参加しなかつただろう。

このエッセイを読んで思ったことを秋山さんに報告したかどうかは忘れてしまった。まだ「コスモス」に入っていない頃だったのでそのまま過ぎたのではないかと思ひ返している。

中国北京の大学生は非暴力で闘い、敗れた。秋山さん、『わが暴力考』にこの事件は一章書き加えられるべきだと思ひますが姿が見えず残念です。

秋山清の

「われを上げます歌」

岡田孝一

詩の仕事をはじめとして、秋山清の文学上の諸作品を読むとき、私などがいつも強く感じるのは、その不同調の姿勢である。個人的なことを言えば、私にとって秋山清は、三

られるべきものである。止むを得ずであってもこの犠牲は耐えられない。やがて来るべき明るい社会、この現実を改革するための敵からの権力奪取、のためのテロ、そのための止むを得ない犠牲は忍ぶべきでないか、というような考え方、そのことにある日、私は対立する。革命のため、民衆のためというその仕掛けが、現実には市民の命を失わせるということ合理づけようとするのは、所謂ヒトラー的独裁主義、あるいはスターリン主義、あらゆる権力信奉、犠牲を払っても打倒しなければならぬそのもの、そのことへの奉仕ではないか。今日生きていく人間の現実のためにも、革命思想は有効に働かねばならない。未来、そしてユートピア、その完全な平和と安寧の夢のために今日の民衆や私自身が犠牲となることを唯一とするのは、許されない倫理でなければならぬ。と私は、私個人は主張する。

人を殺すことは自分を殺すことである。この論理はすこし出鱈目のようであるが、殺害者が自分の生活を狭め生涯を縮めることということは、こういうこともできよう。それをあえてしてまで、熱狂的な革新主義

十年に及ぶ年月の間、つねに変わることのない敬愛の思いを抱いてきた先行者であるし、心やさしく面倒見のいい秋山に心を許して、勝手に甘えてきたところもあるのだが、それでも時として言いだしたら多少間違つたことも強引してしまう意固地さと、わがままな駄々っ子爺さんぶりに手を焼いたこともある。だがここで言う不同調の姿勢は、そんな私的なことではもちろんない。アナキズム運動から出発した初期の詩業から一貫している支配権力への反逆、戦時下における侵略戦争と、それに迎合する社会風潮へのひそかなる抵抗をにじませた詩作品、さらには戦後の政治勢力による愚劣な文学運動への干渉や、これに便乗した一部の文学者、詩人の創造活動の上での誤つた政治性や退廃へのきびしい告発といったものが、秋山清の不同調の姿勢の根底にある。そしてそれを支えるものは、秋山自身のアナキズムにも縛られることはないとする徹底した自由な思想なのである。

秋山清の批評対象に向けての容赦のない批判は、一般的に辛辣な毒舌として受けとられ、また誤りに対していつまでも忘れることなく、とことんまで追及する執拗さに音をあげて、反感を抱いた人も多かったと思われる。だが

者は爆発を仕掛けて、民衆の蜂起と反乱を導こうとしている。公と私とがそこでは一つになつていく。主観的に見ればそれは一つの到達した生き方死に方、でないとはいえない。行為者の場をそのまま認めるのではないにしても、この理解は成立する。しかしひるがえって犠牲者としての個、即ちその民衆の一人である私は、これを拒否せねばならない。目的への忠実さ、その目的の高貴さを説かれても死ぬことはイヤだ。生きることに倦怠しすぎた老蒼といえども、仕掛けられた時限爆弾によって生を奪われることは心外であろう。如何に現実を批判し、否定し、変革を期待するといえどもである。

引用は長すぎたかも知れない。が当時「幻野」を読んだときの印象は十数年過ぎたいまもよく憶えている。わたしが体験的な素朴な直観で感じとつたことを、秋山さんはアナキズムに基づく展開で社会と個人を結び独自の体系として示したのであった。

反体制の陣営のなかで、秋山さんの発言は批判を浴びたかも知れない。社会を改革する上での暴力は公けの暴力として認める、とこ

このとき秋山が、その心情の内部で素漠とした空虚な思いに必死に耐え、くじけそうになる気持をふるいおこして、自らを上げましたこと、秋山が孤立について論じたり、「ある孤独」と題して書きつづけた詩の連作を読むとき、私には秋山清の胸の内を吹きぬける木枯しのごとき寂寥の音が、痛いほどに聞こえてくる。また八背なかには目がないから√うしろからついてくる人たちのことは見えないはずなのに、それが見えてしまったこと、のやりきれなさを、秋山はもてあましていくようにもあつた。

秋山清はその第一詩集である『家のはなし』の最後に「われを上げます歌」（一九五六年作）という十四頁にわたる長い詩を書いていくが、それから約十年後、第三次「コスモス」に連載し、太平出版社から刊行された『戦後詩の私的な回想』（一九六九年刊）のなかで再びこの詩をとりあげて、次のように書いていく。

△「固定した詩観。俗流リアリズム。アナキ。非組織的。非民主的。非民衆的。非大衆的。非人民的。非科学的。空想的孤立主義。無目的。リリシズム。自然発生的。独善的。

客観主義＝傍観主義。傍観的リアリズム。機械論的唯物論から下降した経験主義＝俗流経験主義。素朴リアリズム。即自主主義。自然主義。自然主義的リアリズム。観念的客観主義。手前みそ。俗物。腹ぐる。そしてスパイ。」この誹謗の辞の集積ともいふべきものは、戦後、時にふれ折にふれて、いろいろな人が、いろいろな時と場で、私に向けて発した評言であり、それを、いつからということもなく私が、記憶に止めておいたものである。諸君はこの軽侮と悪意の言葉の集積のなかに、私に向けて妥当に発せられた批評を見ることのできるか。この言葉の集積で築かれた壁は堅く厚く、またその向こうに、いわゆる戦後民主主義のなかに頹廃しきった思いつがりと俗物そのものの左翼的政治主義と、だからこの上なく非文学な文学理論を、諸君は気づかないであらうか。

「われを上げます歌」という詩を私はそのような腐敗墮落に向けて書いた。積年の陰日向ある罵詈ざん詠が私に向けられたこととそれが私を上げますものでしかあり得なかったことを、その詩をかくことよって明らかにし、同時にこの孤立無援こそ私にとってこのうえない味方であり助手であったことを、主張し

感覚ではなく、庶民の生活感覚や実感から発して、戦争の非人間性にたいして、ささやかな人間感情を守る、というようにかかれています。▽

この時期の吉本の批評は、秋山の戦時下の詩の本質を的確にとらえていて見事であった。かつて思想を同じくし、運動を共にした親しい仲間たちや、アナ・ボル論争をたたかわしたマルキシズム系の文学者も、なだれをうつように時流に便乗して行き、転向を表明したのちは競って国策協力、戦争謳歌に走るという状況のなかで、どこへ発表するという目安もなしに、『白い花』に収められたこれらの詩が書かれていたのである。発表することを考えないから、こうした詩が書けたということもある。秋山が戦争中は木材統制会社などで働いていて、生活に困ることがなかったことも一面では考えられるが、文学者にとって自分の作品を発表する場がないことは、経済的にもそうだがそれ以上に精神的な苦痛が大きいと思われる。つい自己の意に反しても社会の風潮や読者の動向にあわせてしまうこともあるし、より多くの読者に受け入れられるものをという編集者の意向などが拍車をかけることになる。中野重治にして一九四二年の

てみたかったのである。▽

引用がなくなつた。ここで秋山清の思想を論じ、詩作の内容に言及して行くのは、許された紙数の上で無理であるが、一読すればその必要がないほど事柄の是非は明確であろう。秋山におけるところの不同調は、単に政治的思想的信条からする権力への反逆といつたものでなく、もちろんそれも大きな要素としてあるであろうが、なによりも非難、曲解、中傷のなかで孤立感をかみしめ、頼みとし得るの自分のみとする孤独の思いをバネとしたところに、秋山の不同調の姿勢の強さがあると知るべきである。

二十代の青年期に、詩誌「弾道」を共に出したときからの友人である小野十三郎は、秋山がガリ版刷手づくりで出したいと望んだ詩集『豚と鶏』（一九六八年刊）にあとがきを書いて、

△いまもつづいていっている秋山との長い交際の中心で、私が感ずるのは、われわれが忘れようとしていることや、かくしおおせたと思っているような過去の傷痕に注がれている彼の鋭いまなざしである。ニヤニヤ笑っていても彼は決してようしやしない。▽

として、小野が秋山の詩集『白い花』を詩

文学報国会発足を前に、これに入会できないと執筆の場を失ってしまい、生活にも困ることになるから資格を認めてくれるようにと懇願する屈辱的な手紙を、菊池寛に書いたことが知られている。そういう不幸な時代であったのだが、考えてみればこういうことは現在の社会においても、それほど事情は変わっていない。秋山清のように戦前、戦中、戦後を通して毅然たる姿勢を崩すことなく、数々のすぐれた著作、詩集、文学史の仕事をしたながら、ついに文学賞のみならず、賞と名のつくものに一生無縁で終わったことは、国家権力はもとより、社会にも文壇、詩壇にも、ジャーナリズムにも背を向けて迎合してこなかったことの証左であり、賞賛にあたいする立派さであったと思う。

しかし秋山にとってさらに耐え難く不快であったことは、戦時下多かれ少なかれ節を曲げたアナキストたちのなかから、敗戦後の社会に勢いを得た共産党の進出をみて、マルキシズムに思想転向する人間が続出し、なかには秋山に対してまで時勢におくれるから共産党に入れとすすめる者があったことであろう。古い友人が本当に善意の気持から秋山の身を案じ、いま入党しておかないとこの先どんな

時評でとりあげて、ここに収められた詩の大方は戦時中の作だが、いま読むと衝撃力がないアと言ったところ、秋山から「戦後の人はともかくとして、小野の発言の中に、あれは昭和十年から二十年までの、やや特殊な条件の中のものであることが、私と同年輩同時代の小野によって見すごされたことは、作者秋山のために遺憾とする。こんな状態だから私は、戦後詩の私的回想によって戦時中から戦後へかけての民主主義への転向のあわただしさの中にひそむ詩人の自我の無責任を、もう一度探求する必要性に迫られるような思いになる。」と反論され、わが身をかえり見てぐうの音も出なかったと告白している。こういうことをさらりと言いながら、本質を鋭くとらえているのは、さすがに年来の友として秋山を知る人の言葉といふべきであらう。

詩集『白い花』もまた、ベトナム反戦直接行動で逮捕された笹本雅敬たちの救援資金のため、一九六六年に急いでつくられたタイプ印刷の詩集であったが、巻末の解説を吉本隆明が書き、そのなかで抵抗詩人と呼べる詩人は、金子光晴と秋山清の外にいないと断言している。

△秋山の戦争詩の特徴は、おおびらな抵抗

ことになるか、一冊の詩集も出せないようになるかも知れないと心配してくれたというから、秋山にとってはますますやりきれないことであった。

また戦後の一時期、マルキシズムの側からの、はっきり言えば共産党の文化政策の愚劣、横暴が眼に余り、大衆運動への介入、干渉が平然と行われ、そのため文学運動のなかにも混乱を生じたことがあった。このとき秋山は新日本文学会という文学の大衆団体のなかで、マルキストもアナキストも、さらに無党派の人間も、共に協力し統一して文学として運動を進めて行くべきだとの考えに立って、周囲の無理解やさまざまな妨害のなかで奮闘した。このときの記録は秋山自身が『文学の自己批判』（一九五六年刊）に書いている。私は無党派の人間とはいえマルキシズム寄りなので、秋山とは思想的に異なるのであるが、これらのことに対する考え方は秋山と完全に一致するし秋山の言動から学ぶところが多かった。ところが現在でもアナキストの一部の人たちに、秋山は戦後新日本文学会に入って、共産主義者と妥協し行動を共にしたと非難する声が強強く残っている。この人たちは思想は異なっても、人間としての信頼に重きを置く

秋山の考えを、到底理解することはできないであろう。自ら選んだ道とはいえ、秋山清も全くさまざまな非難、曲解、中傷のうずまくなかを生きてきたものである。自らを「われを上げます歌」ではげましたくなるのも無理からぬことであつたと思われる。

秋山清と雑談して、**「詩をなぜ書くのか」**と自問する形で話題とすることが度々あり、これが**「詩は自分のために書く」**という形ではっきり主張されたのは、一九七五年三月に名古屋で開かれた吉田欣一詩集『わが射程』出版記念詩論会に、武井昭夫と共に問題提起の報告をしたときであつた。詩論会に出席していた小野十三郎は、このあと読売新聞にエッセイを書いて、詩論会にもふれながら秋山の**「詩は自分のために書く」**とした意見に共感を示したが、もう一人の報告者であつた武井昭夫も、詩論会の司会をした私も、そして出席者の多くもこの段階では秋山の意見を十分に理解したとはいえなかつた。なかには半ば冗談口にして**「自分のために書く」**のであれば、作品をどこにも発表しないで机の引出しにしまいこんでおけばいい」という意見も出たくらいである。秋山は**「事件の詩」**

を問題にして論じていたときは、**「自分に即して書く」**「自分に引きつけて書く」ことを強調していたので、それが**「自分のために書く」**と変化して行く道筋をもっとくわしく知りたいと私は考えていた。

私自身のことについて言えば、このあと同じ年の十一月に、中野重治をかこむ「作家との午後」の集まりが新日本文学会で開かれて、この席で司会をしていた田所泉の「中野さんが期待する文学作品はどんなのですか」という質問に「どんなものって……僕が期待する作品がこんなものだ、ということがわかれば、自分が書きます。」と笑わせながら「しかし私は、作家たちや詩人たちがもっと本心に自分のために書くという方向にもって行く必要があると思いますね。」と答えるのを聞いた。私は先の詩論会での秋山の発言のあと、秋山からさらに具体的に話を聞いており、このことは秋山自身のなかでもまだ確固たる結論はでていないので、さらに深く考えるためには、「コスモス」誌上でも同人に論議を呼びかけて行くつもりだということであつた。私はアナキズムに立脚する秋山の考えの根拠については大体において理解することができた。けれども共産主義者である中野重治の

口から、そういう言葉が出たことは意外であり、釈然としない思いもあって、**「自分のために書く」ということが、自分が本場にめざす方向のものを、ジャーナリズムや外部の思想などにとられずに書いて行くのだという意味では理解できるけれども、ただ何でも自分の思う通りのことをやればいい、自分の好きなことを自由に書けばいいのだという形にとつてくると困るのではないか。**現在の文学全体の傾向や、特に文学運動の停滞している現状を考えると、いま中野重治がそういう言い方をするのは誤解を招くのではないだろうか。」と異議を申し立てたことがある。中野は「君がいろいろ心配することはわかるし、その意味に賛成でもあるが、自己のためという場合の**「自己」**がどういふふうに使われてきたかということ十分に考える必要がある」と答えている。ここではそれを論じるのが目的ではないので省略するが、この記録は新日本文学会編集で、毎日新聞社から『作家との午後』として刊行されているので参考にしてほしい。

このことを秋山清に話したところ、中野の真意がどこにあるか、もっとくわしく知りたいたいと大変に関心を示した。そして約一年後の一九七六年十二月に秋山と共に中野重治の自

宅を訪れたとき、夫人の原泉も同席して、中野が刊行中の全集のあとがきを執筆するため、戦争末期の秋山とのかかわりをもつたある事柄について、事情を確かめたりしている会話を傍らで聞く機会があつた。私はマルキズム、アナキズムと思想を異にした中野と秋山が、晩年に至つたほぼ同じ時期に、お互いに論じ合つたり、相談したわけでもないのに、「もっと本心に自分のために書く」という方向にもって行く必要がある」とか「詩は自分のために書く」という意見を、ちがった形であっても各々の文学論として出してきた必然性が理解できるようになつてきた。両者の思想、文学論にちがいはあつても、その根底に戦時下における文学者、詩人としての自己の生き方、姿勢をかえりみる思いが投影していることがうかがえる。それはまた現在の社会風潮のなかでの文学者、詩人の身の処し方について、権力や権威に迎合して、自己を見失つて行くことを危惧し、警鐘を鳴らしていることでもあつたのだ。

中野も秋山も各々の立場と動機から「自分のために書く」と言っているが、共通して考えられることは、戦時中やまた戦後になつてからも、文学者が自己の創造上の仕事に対し

て、あまりにも自分というものを見失つてきたのではないかとする思い、それが国家権力であつたり、政治勢力であつたり、またはジャーナリズムであつたかも知れないが、つねになものかに迎合し、便乗してきたことが多かったのではないか。このような文学者の姿勢に對しての自他を含めた批判であつたと思う。「自分のために書く」ということは、誰からも強制されず「自分のためにならないものは書かない」「自分の意志に添わないものは書かない」という自由を自己のなかに確保することでもある。

このように考えてくると、私のなかではじめて秋山清の「われを上げます歌」と「詩は自分のために書く」ということが、同一線上にあるものとして結びつけられ、二人の文学者、詩人の言わんとしたことの深い意味を知ることができるのである。

プロレタリア詩と 人民詩精神

吉田 欣一

秋山清の最後の詩集となつた『自選詩集』(一九八四年、ばる出版刊)に「自選詩集とともに」で書き遺したあとがきの文章がある。「現在のプロレタリアの詩の問題は、詩の問題としてはもっとも軽んじられているかのようであるが、そうした易く扱われていること自体に問題があり、将来に向けて私などはそのことを重く考えようとしている。」

戦後ずーっと、ニッポンの詩の問題とは、

詩の諸問題の中の、詩の表現ということの問題であった。表現の諸問題が、表現のみの諸問題にすっかり置きかえられたために、われわれの周辺の詩は、遊びの詩にその全精力が転移されてしまった、かの感がある。文学のなかでもっとも思想に強烈な詩が、もっともその力の弱い表現の諸問題に席をゆずったとき、ニッポンの詩は、詩の政治性と美術性をうしなってしまったのである。

プロレタリア詩が遭遇した政治的な壊滅が文学の喪失に他ならなかったのを思い出して見れば、そのための詩の亡失もすぐ理解できることを私はうたがわなかった。

強烈とはいいかねるが、そういった解釈からプロレタリア詩に志したすくなくない人々によってそれは支えられた、というのが大ざっぱな私たちの詩論であった。無論これは政治の問題ではなく、文学の生命を考えた問題である。このもう一つの理解の問題は、戦争と政治に埋没し、ひるがえって戦後の民主政治の下に、文学と政治を置き忘れたのであった。

この秋山清が指摘した戦後詩についての問題提起を私は全く正しいものと理解すること出来る。こういう秋山清の考えの背景には、

「今年（一九七四年）の九月に、私は大急ぎで二つの詩集に『あとがき』というものをかいた。はじめに吉田欣一の『わが射程』、二つめは私自身の選択になる『アナキスト詩集』、この二つの詩集について書きながら、私は言明し難いある当惑に落ちていった。そしてその不安が何ものであるのか、これまでのように割りきれぬものでなかっただけに、しだいに途まどいは深くなってゆくような思ひだだった。（中略）手探るように、以下のようなことを考えつづけた。

『わが射程』については、わが国のプロレタリア詩とその運動に対する日頃の思いを下じきにして、その上に吉田の詩の仕事を置くことによって、プロレタリア詩の活動の得失を考えてみたかったのである。イデオロギーとして吉田と私には対立がある筈だ。しかし「詩とは何か」、あるいは「詩の方法」において対立があるとは私は考えない。あるいは、だから吉田も、彼の今日までの詩の総括ともいふべき『わが射程』のあとがきを私に許したのであろう。これは私にとって、ころよいことである。いいかえれば、詩の問題としてアナキズムとボルシェヴィズムがどこかで従

伊藤信吉氏と共同して編さんした日本の詩の歴史の中の社会主義文学運動の詩集、詩誌らの復刻の大きな仕事があり、そのなかからプロレタリア詩の持つ人民の重さと潮流の烈しさを感じ掴みとったものが前記の文章となつたと私は思う。

文学の持つ思想と詩の問題について、私は秋山清にもう一步突込んで聞いて置きたいことがあった。今秋山亡き後になって、それから後悔に似た思いと、人間としての深淵なものの前に立ちつくすこだわりの思いがある。人にはそれぞれの精神の内奥には踏み込むことはむづかしいことがある。秋山清は私と接する時はいつもにこにことしていたことが印象として残っているが、まあまあでは済まない妥協しない芯の強さがあつた。それは信念といつたものに支えられた強さでもあつた。若い日にプロレタリア文学をアナキズムの立場で共に闘った仲間、同志、小野十三郎にも岡本潤にも遠慮会釈なく自分の考えを押し出して反対し文句をつけたりしている。それを知っている私には、秋山清が壺井繁治は、私（秋山）と近く、また遠い人であるといひ、つまり背中をさすりながら、ザマ見ろ、ということもある壺井繁治であると書いているこ

来のイデオロギーのみによる対立を揚棄（？）せんとすること、すくなくとも対立以外に何ももの有りはしないというのではないという、そのところにまで「何か」が進んで来ている（進まねばならないときに来ている）ことを、私たちは確然たる認識として抱え込む以前に、その幾分を実践しつつあるかもしれない。政党次元の問題でもない。芸術のためなどそんなに仰々しく考えるのではない。これは、人間が、われわれは、どのように生きるか（対立し、協力し、融合し、握手し、さらによりふかく抗争して）という問題があるような気がしてならない。（中略）

私は昭和十年以前（及び戦後）のマルクス主義プロレタリア詩とその運動に非難を向けてきた。それはプロレタリア詩の主張には詩と人間を圧迫するある歪んだ思考（文学論として打出された政治論）があり、それと対立しながらの実践が必要であると見たからであり、イデオロギーよりも詩（と人間）を重く見たいと思っているからである。（アナキズムというものが私の思考の自由を抑えることがあつた場合、その捉えられるわが思考に不信の目を向ける自由を私は大切に出来たつもりである。）詩において、また人間として、

とに關係があることがらがある。いわゆる日本共産党の五十年問題といわれている時期にあたるが、新日本文学会であり、この渦中にもまれた時であり、日本共産党を除名された私だったが、その頃のことは秋山清の著書『文学の自己批判』のなかにくわしく書かれている。秋山清の筆法で言えば「ざまあみろと背中をさすられ」たのは壺井でなくて私だったかも知れない。しかし秋山の発言は私の思想との格闘を迫るものでもある。政治と文学に関わることである。私はそれを政党と文学のことと考へたらいひのでないかと苦しい思いで答えたのだが、秋山清は何時もの時とは違う態度で納得はしなかった記憶がある。

私はそうした季節を通り過ぎて、「コスモス」のバックボーンである「人民詩精神」を詩文学の中心軸として自由にやりましようとお互いにめざす状況の中で闘いとして、反権力で一緒にやれることには力を合わせなくては思っていた。このことについての私のこだわりと秋山清にもまたこだわりがあつたことを『あとがき詩人論』（一九七九年、青磁社刊）で知つたのである。「かかわつた二つの詩集から」副題は『わが射程』と『アナキスト詩集』となつていゝ。題名は「『人

現実に対する場合、存在するのは人間であり、人間的共通という問題のみがある。人間についての理解のふかさや愛情と、われわれの思考のイデオロギー的展開との關係がいつも一つに固定しているということは非現実である。イデオロギーと人間（自己）との矛盾を前にして、前者のみにしたがうことを義務づけるという他動的な思考について、考え直してもいいのではないかと、私はいつづづけて来た。われわれは民衆の一人として、そして彼がマルクス主義者であり、また日共黨員などであるといえども、自らの詩を外的なイデオロギーのみに依拠せずに、自己（矛盾多い人格）によって、自己に叛かず書くところからの出発という初歩の心掛けに詩人の姿勢を見る者である。そのことこそが、今やもっとも政治的でもある、といった理解をもたずしては詩は書けまい、と私はいつづづけているのだ。私における、詩を通じての吉田欣一とのある協力は、彼が何々主義、何々派であるとか、そうではないからとかいう問題ではなく、それらのイデオロギーや些末な政治意識では律しきれぬものが息づいているその詩、その人間、においてである。」

この文章を書いた秋山清の内奥の思いには

屈折した思考があったと思う。私は学問的思考の浅さから生活の思考で理解しようと思う能動的なものからの弱さを強さとして詩を書いているところがあるので、それだけに『人民詩精神』という言葉の内容の充実のためにかつてのプロレタリア詩をふまえて、私よりも秋山清により深く重いものがあったと思うのである。そこから学ぶものが私にはあった。

プロレタリア文学の伝統の中で、何を捨て、何を取入れ、また詩として何が失われてしまったかについて、お互いがこだわり続けて来たとし、こだわり続けて行くことが残された者の仕事として今あるように思うのである。『思想運動』に連載中の「プロレタリア文学運動の革命的伝統に学ぶ」児玉明の労作も示唆することが多い。ここにも、こだわっている人が居ることの証しでもある。

西杉夫の『プロレタリア詩の達成と崩壊』（一九七七年、海燕書房刊）の中にも有益な指摘があるが、崩壊の主張の意味として一面的にとらえているのではないかと思う。それはそれとして異議をさしはさむつもりはないが、崩壊し焼失しようにみえる土壌の中から不死鳥のように再生してくるものが詩のな

かにあってもよいと考えられないか、あるのが当然であって、人民の詩精神は、秋山清の前記の主張とその作品の中に汲みとるものがあると私は思う。

秋山清がこだわるプロレタリア詩のことは単なる青春時代の懐古ではない筈である。日本の現実をどう把握するか、手っとり早いところでは、リクルート疑惑のことひとつ取りあげても、天皇の死に対しても詩人たちは、なんの反響を示さずむしろそれは自分たちに何のかわりがあるのかと考えているのである。政治のことではなく詩のこととしてである。私は思うのである、人間としてこれだけいのかと、現代詩人はこの頃の学生のように無関心でよいのかと。私は否と言いたいのである。文学運動としてのプロレタリア文学への革命的批判が今日どう生かされ、どう再建されるかが重要ではないのかと。私との交友のなかで秋山清は浜口国雄の詩集について関心を持って高く評価していた。是非書きたいと約束もしてくれていた。労働者詩人の動向についても目配りの並々ならぬものがあつた。私は今それを思い出している。

プロレタリア詩なんて言えば何を古ぼけた寝言をいっているのだと多くの人は言うだろ

うが、敗戦後四十四年たって、その中で無数の働く人々の詩は生産されて来たとし、それらは当然批判し検討されねばならないが、人民の生活の中から反権力の詩の伝統は消えさるものではない。

私はその詩の仕事の今日的継承者として若い世代の詩人たちの登場を見る。今年の新日本文学賞を得た安里健の出現である。「反天皇」詩集を出した井之川巨、国鉄詩人の稲葉嘉和、山口県徳山に住むうえだひさしである。この人々の詩を読むことは私自身にも影響を与えてくれて、私の力となることを楽しい展望として見ている。